



この原稿は、和久陶平さんに執筆していただきました。  
 ◁今も有田小学校で、大切に保存されているピアノ。

## シートマイヤー

有田町立有田小学校は、明治4年（1871）に開校し、昨平成3年めでたく創立120周年（佐賀県最古）を迎えた。

私はその記念行事の一つである「記念講師」として四年生75名に音楽を中心としたお話（というよりみんなと遊び）をさせてもらったが、その打ち合わせに登校（？）して出雲悠司校長先生とお話しているうちに、私が確か六年生頃に初めてピアノが購入されたことを思い出して、その記念すべきピアノはどうなったかとおたずねしたら、倉庫に残っていたので、音楽室に出して児童に使わせているとのこと。このピアノは実に65年前のものである。

※この続きは2ページに掲載しています。

# 皿山びとの歌



## 有小で音響学を指導

私は戦時中の昭和18年頃から、当時潜水艦の聴音（ソナーという機械を用い、相手艦の出す音をきいて敵味方の識別や距離の計測をする）などの修練に役立つ音感教育の必要性から帝国海軍の要請があり、有小の先生たちに音響学（「音」というものを物理学と音楽の両面から科学的に分析して、その複雑な性質や関連性を知り、科学や音楽に利用する学問）と合唱の指導に週1～2回参上していた。

私が学生時代趣味としての合唱音楽を、よりいっそう深く広く理解するために師事した合唱・音響学・音楽理論・音楽史などの恩師であり大阪音楽学校（現・大阪音楽大学）の主席教授でのちに全日本合唱連盟理事長になられた、故・長井孝（ひとし）先生が有田に来られたので、小学校にお招きして、一席のご講話をお願いした。

## 芸術文化への熱意

その長井先生は音楽室で、かなり古ぼけたピアノの蓋を開けて驚かれた。「こんなすばらしい世界一流の珍しいピアノが、佐賀県の、有田の、しかも小学校にあるなんて…」と言われて、一同はびっくり仰天。

そのピアノの内側には

SCHIEDMAYER  
Pianoforte Fabrik  
STUTTGART

と刻まれた銘板が貼りつけてあった。その意味は、

シュツットガルト市  
ピアノ製造工場  
シートマイヤー

というのである。

よく考えてみると、このピアノは当時の町や小学校、それに父兄会の有力者の人たちが、有田らしく教育や芸術文化に非常な熱意があって「どうせ音楽教育に必要なピアノを買うのであれば、一流の高級品を買おう」と言う考えから出たものにちががなく、大正時代にこのような結論になり、しかも門司三菱を通じてドイツから直輸入されたことは、まことに立派なことで当時の関係者の方々の英断には頭が下

がる。

このピアノはアップライト型。キーは白鍵が52、黒鍵が36の88鍵で、大型のコンサート型ではない。

このピアノのキーを叩いてみると、だいぶん音が怪しくなっていて完全ではないが、よくも保存されていたものである。

## ピアノ様の奉迎

さてこのピアノは、当時の「校務日誌」によると、大正15年（1926）6月13日に学校へ搬入されているが、その前日、家永利三郎校長先生からこのことを聞かされた我々児童の大半は自発的に翌日の午後、受取りの四先生とともに上有田駅へ「ピアノ様の奉迎」に出かけた。

駅の北側の貨物到着場には古木のきれいな築地に入ったピアノが着いていて、これを取り巻いた悪童たちは歓声をあげ、運送会社の馬車に積み込まれて白川の学校まで運搬されるのにワイワイガヤガヤいながらお供をしたのであった。

翌日には披露演奏も行われた筈であるが、それはよく覚えていない。

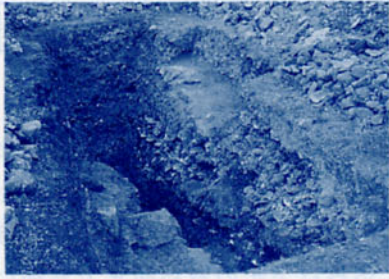
## 世界一流の製品

いずれにしても出雲校長先生は「そういう由緒深い一流品であれば、その由来や意図を記した銘板をピアノに貼り付けて大切に保存し、先輩諸氏の卓見を後世に伝えたい」との御意向であった。

そしてこのような、当時としてはすばらしい高級ピアノであるから、私は専門ではないが、も少しくわしく知りたいし、有田町や小学校としても記録に残してもらえればと思いピアノの文献を調べてみると、「シートマイヤー」というのは、ドイツにおけるピアノのメーカーとしては1750年頃から世界的に有名であって、その後と同じドイツでピアノを製作したアイバッハやチェッカーリングとともに名品といわれたが、惜しいことに戦争の影響などで、有小が輸入した頃以後に業界から消えてしまった。

現在ピアノとして最高と言われるアメリカのスタインウェイは1800年頃から製造を始めたものであるが、武蔵野音楽大学の御好意による米国版「音楽楽器大辞典」を見ると、有小が輸入したこのシートマイヤーは1851年ロンドン大博覧会で金メダルを、1900年パリ大博覧会でグランプリを獲得しているので、世界一流の製品であったことは間違いなく、えらい立派な品を入手したものと先輩達に敬意を表したい。





平成3年度の

## 古窯跡 発掘調査

10年計画でスタートした古窯跡の発掘調査も半分が終わりました。この小さな町で生み出された陶磁器の多彩さ、多さに、今更ながら舌を巻く思いを募らせながら、日々出土した陶片との格闘を繰り返しております。

今回は先号でも御紹介しましたように、平成3年度の発掘調査から、外尾山窯跡について筆を進めて行きたいと思います。

### ●外尾山窯跡

外尾山窯跡はその名前の通り、外尾山地区にあります。この付近は『慶長年中肥前国絵図』（1605年～1610年前後）にすでに「外尾村」の名が登場し、有田のなかでも古くから開けた場所だろうと思われる。ちなみにこの絵図では、他には大野から境野付近の地名が見られるだけです。

調査では、登窯が5基発見されました。しかし出土した製品などから判断して、全部で6、7基はあったと推定されます。窯が最初に作られたのは磁器生産が始まった1610年代後半～1620年代前半ごろで、今からおよそ370年ほど前のことです。その後、繰り返し窯が築き直され、最後は明治時代の終わりごろまでは続いていたと思われます。この間染付や青磁の皿類を中心に、膨大な量の製品が生産されました。例えば一つの窯だけで、失敗品を捨てた土層が約3mもの厚さで堆積している部分もありました。

### 窯は平均的大きさ

発見された中で最後まで稼働していた窯は、現存する安政6年（1859）の『松浦郡有田郷図』にも描かれています。この絵図で、焚口である胴木間と製品を焼く15の窯室があったことが分かります。当時の窯は山の斜面に作られており、焼成室一部屋の横幅がおおよそ7～8m、奥行きが5mほどもありました。これを単純計算すると、全長が80m近くもあった計算になります。しかし当時の有田の窯として

は、これでも平均的な大きさです。今日までに文献などで分かっている最も大きな窯は、焼成室が28室もありました。これを同じように計算すると140mを越す長さになり、上の方の窯室に製品を詰めるのは、さぞ大変な労力であっただろうと思います。

再び時代を遡ってみることにしましょう。この外尾山の窯に初めて火が入ったころすでに窯が作られていた場所は、三代橋付近を中心とした周囲の丘陵がほとんどで、天神森、小物成、清六ノ辻、小溝といった窯場に、黒牟田の山辺田窯が加わるだけでした。そして外尾山とはほぼ同じころに開窯したのが、戸杓の向ノ原窯。内山地区には、まだ本格的な村すら誕生していませんでした。

### 管理が容易な狭隘な地形

この有田の西側と東側で、どうしてそんなに差があったのでしょうか。一つは東西の地形の違いを思い浮かべていただけると、理解しやすいと **思**います。平地の多い西側と、鯉の寝床のように長く細い生活空間しか持たない東側。これはすなわち、江戸時代の最も基本的な生業である農業の適・不適を如実に表しています。当然窯業成立時期には、まだ日々の暮らしを送るために農業を欠くことはできなかったでしょう。事実、山内町などの平地を控える中樽あたりでは、外尾山窯などからそれほど遅れることなく窯が築かれています。内山地区は猿川など当時の通路に近い場所では、いくつか比較的早く築かれた窯が見られますが、本格的な町として整備されたのはおそらく寛永14年（1637）ころと推定されます。この年佐賀藩は、燃料確保のための乱伐から山林を保護するため、西側の窯場を廃止して東側の13カ所に統合しました。つまり今の内山地区は、藩の政策によって作られた町というわけです。この政策の真意は、磁器生産が産業として有望であることを確信し、磁器専業体制の確立を目指したものと思われる。こうした意味では、内山地区の狭隘な地形は逆に管理が容易な場所でした。そしてこれを実践するために、泉山と岩谷川内に口屋番所が置かれています。その後は江戸時代を通して、日本磁器の最先進地区として不動の地位を維持し続けました。

今回は、話が横にかなり逸れてしまいましたが、有田の成り立ちについて、多少御理解いただけたのではないかと思います。今後も紙面の都合のつく限り、調査で明らかになった有田の姿なども御紹介して行きたいと思います。

## 発掘れぽうと





(写真上)

上幸平の山王神社には、メス猿が奉戴されている

(写真下)

中樽の山王神社(岩天神)に奉戴されているオス猿



## 山王神社祭 (さんのんさんまつり)

山王神社の祭は12年に一度、申年の5月、初申の日に行われる行事で、祭を行う二区の人たちは「さんのんさんまつり」と呼んでいます。近年では陶器市と重なるのを避け、また人手が必要なため平日では行えないことなどから、日をずらして行われているようです。

「さんのんさんまつり」は陶業の振興と五穀豊穡を祈願して行われるもので、当日は神事のあと笛や三味線の音楽にあわせて「さんのんさん」と呼ばれる神の使いの猿の像が、上幸平の山王神社から中樽の山王社(岩天神)まで奉戴されます。上幸平には雌猿が中樽には雄猿が奉納されており、さしずめ12年に一度の逢瀬(おうせ)というところでしょうか。また各家庭では、軒先に布で作った猿の人形を糸に結びつけて吊し「さんのんさん」を出迎えます。

この行事のはっきりした起源は分かっていませんが、申年ごとに行われ今日に至り、壬申の年である今年(2016年)は5月24日(日)に行われます。いったい、どのような祭りになるのか楽しみです。

## 街角の歴史

### 古文書教室

自宅の古文書を読んでみませんか?今年度も古文書教室を開催します。文字のくずし方から教えてもらえますので初めての方でも大丈夫です。ぜひご参加ください。お申し込みは下記の資料館までお願いします。

- ・講師 前山 博先生
- ・日時 毎月第2水曜日  
13時～15時(中級)  
19時～21時(初級)
- ・場所 生涯学習センター  
1F 集会室(中級)  
3F 学習室(初級)

### 新収蔵資料

新たに寄贈、寄託を受けた資料です。

- ・土壁(2点) 蒲地 豊氏
  - ・浮立一番鉦(1点) 戸矢区
  - ・やきもの(5点) 藤崎欣一郎・剛氏
  - ・唐箕(1点)・千歯こぎ(1点)・型打ち(5点) 黒川政二氏
  - ・赤絵窯で使用した道具(2点)・書籍(1点)
  - ・冷蔵庫(1点) 手塚信雄氏
  - ・寄付(蔵春亭のやきものを購入) 久富桃太郎氏
  - ・やきもの(6点) 辛島紙器工業
- また、蒲地昭三氏より来客用として、コーヒー碗12客、煎茶器10客をいただきました。ありがとうございました。

### 白川の細流

桜の花が美しい四月になりました。ここ資料館も桜の中につつまれています。館の見学とお花見をお楽しみになってはいかがでしょうか。おまちしております。(萬)

## 皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.17

発行年月日 \* 平成4年 4月 1日

編集・発行 \* 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地

☎0955-43-2678